

## 研究ノート

## 英語の統合的能力伸長を目指すジャーナルライティングの試み\*

<sup>1</sup>若本夏美 <sup>2</sup>福島祥一郎<sup>1</sup>同志社女子大学・表象文化学部・英語英文学科・教授<sup>2</sup>同志社女子大学・表象文化学部・英語英文学科・助教（有期）

## How does journal writing contribute to improving English proficiency of Japanese college students?

<sup>1</sup>WAKAMOTO Natsumi <sup>2</sup>FUKUSHIMA Shoichiro<sup>1</sup>Department of English, Faculty of Culture and Representation, Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor<sup>2</sup>Department of English, Faculty of Culture and Representation, Doshisha Women's College of Liberal Arts, Assistant professor

## 1 はじめに

## 1.1 英語英文学科における科目間連携の歴史

英語英文学科では2020年度より1年次生を対象に、2021年度からは1・2年次生を対象に英語でのジャーナルライティング(English Learning Journal、以下、ELJと略称)構想を実行に移している。本稿は研究プロジェクトの一貫として行ったELJについて理論的背景及び経緯、実体について報告するものである。

ライティング能力の伸張は重要であると誰しも認めるものの、4スキルの中では後回しにされてきたきらいがある。文部科学省の学習指導要領ですら、2008・09年の改訂版(文部科学省、2008、2009)ではオーラルコミュニケーション能力の伸張を前面に打ち出し、リーディングやライティングは二の次という位置づけであった<sup>1</sup>。

一方、第二言語習得研究(Second Language Acquisition, 以下SLA)においてはスピーキングやライティングの重要性が理論的に提唱されてきている。例えば、トロント大学名誉教授のSwain(1985)は第二言語の習得にはスピーキングやライティングの活動が肝要であるとするアウトプット仮説を提唱している<sup>2</sup>。もっとも、南カリフォルニア大学名誉教授のKrashen(1982)は、子どもが話す練習をすることはなく目標言語を聞いているだけで母語を習得出来ることから、一貫してリーディングやリスニングの重要性を説いている(インプット仮説)<sup>3</sup>。この二つの

考え方は拮抗するものであるが、特に英語が教室外でもコミュニケーションの手段として利用されているようなESL(English as a Second Language; 英語を第二言語として利用)環境下ではなく、英語使用が教室内に主として限定されている日本のような場合には、Krashenが主張するようなインプットから自動的に英語が口からついて出るという状況は想像しにくい。Swainが主張するように、学習者の背中を押して英語を話したり・書かせたりすること(pushed output)が必要となるのではないだろうか。

一方、留学をすることなく国内における学習によって高度な英語運用能力の育成を目指す英語英文学科はこれまで大きな悩みを抱えてきた。語学教育においては継続性も重要だが短期集中が効果的であることが実証されてきた(Lightbown & Spada, 1994)。例えば、アメリカミシガン大学で日本語を学んだ同志社女子大学のJuliet Carpenter名誉教授によると大学の日本語の授業は毎日組み込まれていたとのことであった<sup>4</sup>。これは語学科目に限った話ではなく、欧米の大学の授業は通常、同じ授業科目が週2回または2時間続きで行われることが多い<sup>5</sup>。同じ授業科目が週に複数回設定されたり、2コマ連続で行われることの教員や学生への負担は少なくないが、利点も多い。よく欧米の大学では1つの学期に受講する科目数が精々4コース程度であるとよく言われるが、これは週に何度も授業があるからであり、受講科目が少なく、回数が多ければ、

自然と授業外学習時間も増え、その科目に集中して学ぶことが可能となる。週1回に比べると記憶に残りやすいため、授業内での復習の時間も不要であり、より掘り下げた学習をする事が可能となる。日本の大学生が勉強しないと批判されることが多いが、これは多くの科目を履修しすぎているために学んだ内容が定着せず、受講科目が多いが為に参考文献を読む時間もないのである。

小中高等学校の根本的な問題点が大クラスにあるように、この「広く・浅く」の大学の授業スタイルは日本の大学の根本的な問題点でありながら、文部科学省も各大学もわざと気づかないようにしているのか触れてこなかった。吉見(2021)もこの点について Semester 制からクォーター制へ日本の大学がシフトする傾向を示していることを指摘し、その中でも「長く多く」はあり得ない話で「短く重く」していくことが教育の質向上にとって極めて重要であると述べている (pp. 150-171)。カリキュラム改革はどの大学でもよく行われているが、このいわば「少なく重く」を含まない改革は小手先の変更には過ぎない<sup>6)</sup>。

しかしながら学科だけでクォーター制に移行することは

望むべくもなく、非専任率が欧米の大学と比較して格段に高い状況では週2回の授業を設置することは不可能に近いのが現状である。

そのような中で、特にスキル系英語関連5科目 (Speaking, Listening, Writing, Reading, 英語情報処理演習、以下スキル科目群と略) を「重く」展開する方法はないか、これまで英語英文学科では試行錯誤を重ねてきた。

まず取り組んだのが、共通教材の選定である。英語英文学科の今出川キャンパス移転直後の2009年度を期に、学科で『Dialogue 1800』(秋葉・森, 2005) を共通テキストに選定し1・2年次のスキル科目群で「5分程度」科目の主旨にあった方法で利用することを決めた (図1は最新の2021年度春学期のもの<sup>7,8)</sup>)。図1が示す通り、週毎に共通のテーマの箇所を読み・聞き・書き・話し・その情報を探すことにより、スキル科目群の連携を取るとともに、内容スキーマ (若本、他, 2017) の発達を目指した。

これは現在に至るまで継続しているが、これは最低限の連携であり、直接の連携を図るために同時に新プロジェクト「回覧板方式」が開始された (図2)。当時はスキル科

## Dialogue 1800 & ENGLISH PLAYBOOK

2021/3/21 改訂

### 2021年度

#### 1年次 **20 Topics from Dialogue Vocabulary 1800: 1st-year students**

秋葉利治 & 森秀夫. *Dialogue 1800* (3rd ed.) 東京, 旺文社, 2012.

#### **PLAYBOOK**

英語英文学会

#### [Spring]

1. Theme 1: Daily Life	7. Potluck Party	pp. 50-53	100-91
2. Theme 2: Customs	15. Credit Card	pp. 88-91	90-81
3. Theme 3: Entertainment	27. Welcome Announcement	pp. 144-147	80-71
4. Theme 4: Health & Medicine	33. Making an Appointment	pp. 174-177	70-61
5. Theme 4: Health & Medicine	43. Getting Fatter?	pp. 218-222	60-51
6. Theme 2: Customs	19. Casual Friday	pp. 104-107	50-41
7. Theme 6: Business	67. Internship Program	pp. 334-337	40-31
8. Theme 9: Law	88. The Jury System	pp. 438-441	30-21
9. Theme 10: Social Problems	95. American Spanish	pp. 471-473	20-11
10. Theme 10: Social Problems	98. Day Care System	pp. 482-485	10-01

#### Option

1. Theme 7: Science & Technology	77. Robot Miner Hunter	pp. 383-387
2. Theme 7: Science & Technology	73. Textese	pp. 366-369
3. Theme 9: Law	89. So Many Lawyers and Lawsuits	pp. 442-445

図1. 各週毎に取り扱う1・2年次共通教材のトピック表 (担当者で共有)

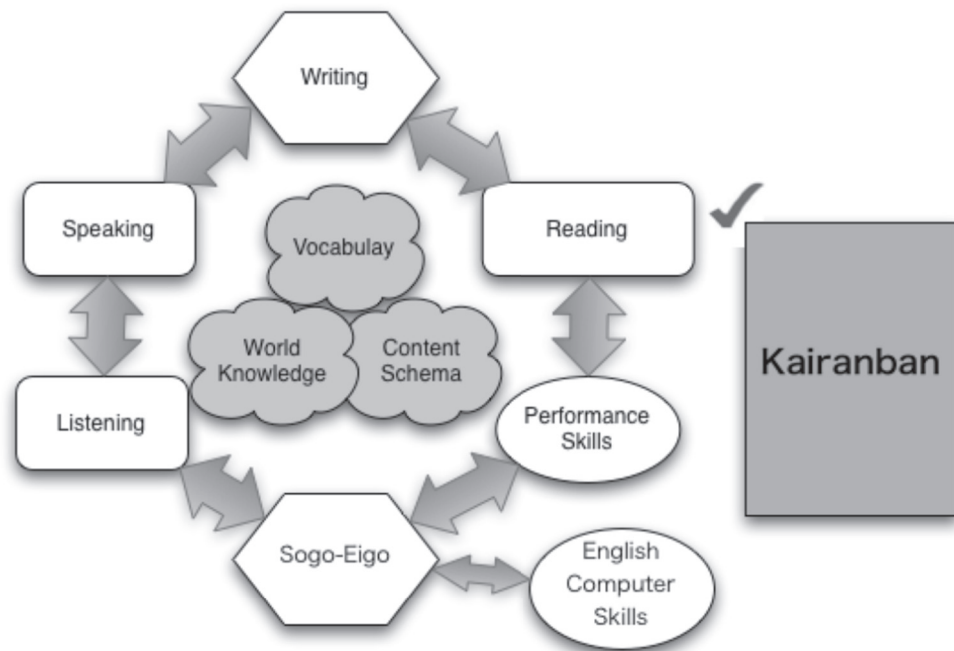
Image of **Kairanban-hoshiki**

図2. 関係教員に当時配布された回覧板方式を表すイメージ図

目群に「パフォーマンス・スキル」コースも含め、例えばAクラスならこのクラスを担当する教員（専任教員・嘱託講師）間で授業の簡単な内容・学生の様子を日本古来の回覧板の方式（アナログ）でコメントを書き入れ、週のスケジュールに合わせて次の教員にメールボックス（デントン館・純正館）を利用して共有してゆくものであった。回覧板には担当教員の顔写真も掲載し、複数（6名）の教員で共通の学生について授業情報を共有することを意図したものであった。通常、他の科目をどの教員が教えているのか、特に大学レベルでは知り得ないことが多く、英語のネイティブスピーカーについては特に情報がなかった状況であったため「一つのチーム」としての連帯感を持つことには一定成功した部分があったが、1 Semester 15回に渡って継続することには困難が伴った。というのも教員は自分の授業に忙しく、（地域の場合でもそうであるように）回覧板を留めてしまう教員が続出してしまったのである。改良を加えながら2012年度まで4年間継続されたが、結果的に円滑に回覧板を共有しながら科目間連携を取ることは成功することができなかった。

## 1.2 英語英文学科の新 Vision と Can-do リスト

共通教材の共有についてはその後も継続されてきたが、科目間連携は手詰まりの状況に陥っていた。そのような中、

当時の学科主任からの特命により新しい時代を切り拓く英語英文学科の将来構想を検討するためのワーキンググループが結成された。2019年5月24日の第一回会議より翌2020年2月12日の最終会議まで計7回、多忙な中でも精力的にミーティングが開かれ、2030年代を見越した、人事構想を含めた学科の構想案が策定された。その中で特に重要であったのが、英語英文学科の新しいビジョンである（図3）。また、このビジョンを実現するために、学生に身につけて欲しい Can-do リストが同時に考案されている（図4）。

これらの新ビジョンや Can-do リストを策定する中で、英語運用能力を高めるために、再度、1・2年次生のスキル科目群の連携の在り方についての議論がもたれた。その中で提案されたのが「教員から学生へ」のパラダイムシフト（クーン、1971）である。新ビジョンと Can-do リストを貫く根幹的コンセプトは「自律的な学習者」であり、学生自らが英語を国際語として使うために、大学4年間の間に自分ができる事を増やしていこう、ということである。これまで教員間連携ばかり検討してきたが、学びの主体である学生自身が学んだことを自分で統合すればよいのではないか、という点に気づいたのである。これはコロンブスの卵的発想であるが、教員主体から自律的学習者という学生中心的活动へパラダイムが動いた瞬間であった。

### New Visions of the English Department

理想の自己を実現し、世界のどこにいても活躍できるよう、新たな時代をグローバルな視野を持って切り拓く学生の育成を目指します。

そのために、高度な英語能力と豊かな専門知識（文学・文化・言語・コミュニケーション）に習熟し、国際語としての英語を愉快地に使いこなせることを重視します。前向きな姿勢を、一歩踏み出す勇気を、自己への誇りを大切にします。

Encouraging students to acquire skills and knowledge to achieve their future goals and thrive anywhere in society. Inspiring a new generation of students who enjoy using English as an international language with global perspectives. Be positive, keep trying and make yourself proud!

図3. 英語英文学科の新ビジョン（2020年から実施）

### ★Can-do Items

#### Basic 5

- ① Students **can use** English as a global lingua franca.  
(英語を国際語として使う)
- ② Students **can use** the computer interactively.  
(コンピュータをコミュニケーションの手段として使う)
- ③ Students **can collaborate effectively** with fellow students and teachers.  
(友だちと協働作業を効果的に遂行する)
- ④ Students **can feel proud** of themselves.  
(自分自身に誇りを感じる)
- ⑤ Students **can have good time management skills.**  
(時間管理をきちんとする)

#### Advanced 5

- ① Students **can act** autonomously.  
(自律的に行動する)
- ② Students **can be risk takers.**  
(勇気を持って思い切った行動をする)
- ③ Students **can develop their emotional intelligence.**  
(自分の感情を効果的にコントロールする)
- ④ Students **can have empathy skills.**  
(共感的態度を持つ)
- ⑤ Students **can have strong and weak ties.**  
(親身なと同時にゆるやかな友だち関係を大切にする)

図4. 学生対象 Can-do リスト（2020年から実施）

### 1.3 English Journal Writing (ELJ) 構想

2019年、新ビジョン策定作業と並行して、英語情報処理演習1の1クラスにおいてこの原型となるジャーナルライティングの試行が始まった。

翌2020年は新型コロナウイルス感染症の影響で世界中の教育機関が大きな影響を受けた年であったが、新ビジョンのスタートと軌を一にしてELJプロジェクトが本格的に開始された。これは回覧板を学生向けに転換したもので、学生はスキル科目群について基本的に毎授業後に、授業リフレクションを英語で書いてゆくというものである（基本的に授業外で記入）。その学生が学ぶ全ての内容を1つのファイル（基本的にMS-Wordを利用）に書き綴り、2020年度は各記入（以下、エントリーと称す）の前には#Speaking, #Listeningのようなハッシュタグマークを付けることによって、各担当教員が学生のエントリーを発見しやすくする工夫を付け加え、毎週manaba（マナビー）のレポートに提出（累積する形で）していった。2021年度は、改良を加え、MS-Excelを利用する方法に変更し、1つのシートの各行を各スキル科目群に指定し、教員からのフィードバックを効率よく行う方式に変更をした<sup>9</sup>。以下、最新の2021年の英語情報処理演習1ならびにWriting Skills Iに焦点をあてELJの実際の運用状況を報告する。

## 2 ジャーナルライティングの実際

### 2.1 Writing Skills IにおけるELJ

Writing Skillsは1年次生向けの必修科目であり、専任教員が必ず担当するアドバイザークラスでもある<sup>10</sup>。受講生数は18名前後と比較的少人数の授業で、他のクラスに比べて教員がよりじっくりとELJを読む環境が整っている。

Writing Skillsでは、その科目名どおり、1年次生に英語ライティングの基本となる英語表現や英文エッセイの書き方を中心に教えている。また、英文を書く回数も重視し、授業内においてフリーライティングなども取り入れている。しかしながら、週一回90分の授業内で書くことのできるライティング「量」には当然ながら限界がある。フリーライティングに割ける時間は10分、多くて15分程度であり、そうした時間では書ける語数も限られてくるからである。また一週間に一度という状況では、絶対的な量が不足しており、かといって「毎日英文日記を書く」というような宿題は学生のモチベーションを保つのが難しい。一科目の宿題としては学生の負担感が大きすぎるため、相当の評価点をジャーナルに割かない限り、学生は労力に見合わない

判断して、途中で投げ出してしまおう。

ELJの科目横断的システムは、このライティング一科目だけでは解決が難しい課題を見事に解消している。学生は各科目において評価されるため、ELJに時間を割くことへのより合理的理由を見出すことができ、継続へのモチベーションを得やすい。また、学んだことを振り返ることで「書くべき内容」に困ることも少なくなり、英文日記にありがちな生活記録の単調さに陥ることを防いでくれる。そして、一科目50語以上、加えてその週の振り返りを100語程度書くことにより、ELJだけで一週間に300から400語ほどの英文を書くことは、最終的に学生の達成感と自信につながる。この語数は複数科目にわたるELJだからこそ可能な数字である

また、ELJは授業内のフリーライティングとの連動が生まれやすく、より効果的なライティング指導につながりやすい。例えば、フリーライティングで何度も同じトピックを使うことは学生の飽きを生みやすく、避けざるを得ない。しかしELJでは、ライティング授業を振り返る過程で、学生はフリーライティングのトピックについても一度書くことになるため、同じトピックを複数回書くという経験を多く積むことになり、アウトプットとして語彙定着の一助となっている。また、ELJは「量」を重視しているため、英文の正確性に対する個別のフィードバックは行わないが、フリーライティングについて授業内でおこなったクラス全体へのフィードバックや、ELJで散見された文法や語法の間違いをWriting Skillsの授業において取り上げることにより、ELJ内での英文の正確性も向上している。

### 2.2 英語情報処理演習1におけるELJ

英語情報処理演習1では先に述べたようにMS-WORDを利用して授業開始第2週目より、毎週課題としてmanabaでの提出を求めた。他のスキル科目群との交錯をなるべく避けるために提出期間は短く設定し、例えば金曜日の授業であれば、提出期間は3日間程度とした（この場合日曜日深夜締め切り）。ELJへの意識を高めるため、教室内活動との連携を試みた。具体的には従来行ってきた共通教材（『Dialogue 1800』、『English Playbook』）の各週の該当する部分の語彙についてGoogle Imageを使った画像検索を共通フォーマットとしてELJの中に組み込み、その他に語彙の定義（英語）、その語彙が使われているニュース（BBCやCNN, New York Timesなどのメディアを推奨）を検索させた。図5は学生が作成した例である<sup>11</sup>。

授業後には授業についての感想だけでなく、考えたこと、


Target word	antonym	Images
Part of speech	Noun	
Meaning	a word opposite in meaning to another	
Example*	"The use of the word implicitly divides people into two groups - with abnormal, the currently used <b>antonym</b> , carrying negative connotations," Walkden says.	
URL	<a href="https://www.bbc.com/news/blogs-ouch-34197074">https://www.bbc.com/news/blogs-ouch-34197074</a>	

図5. 英語情報処理演習1授業内での共通教材の活用（語彙検索の例）

週末の行動など英語で自由に書いてよいと指示を出した。ELJは2020年度同様manabaに毎週課題として提出することを課し、最終成績の20%を占めることをシラバスに明記し、学期はじめに説明をした。

### 2.3 フィードバック

フィードバックはスキル科目群では各コースで学期に4回、英語情報処理演習1では単独のELJとなったため、毎週、計14回行った。フィードバックに際しては、英語の添削でなく、内容についてのコメントを中心に行った。英語情報処理演習1では加えて、学期当初には文書のスタイル（ダブルスペース、インデント、左寄せ、フォントの種類やサイズ、ヘッダー）についてのコメントを加えた。教員からのコメントはmanabaの中に表示され、学生はその内容を確認することができる。英語情報処理演習1では毎週フィードバックを与えるため「成績管理（一括回収・採点）」で一気にダウンロードし、エクセルファイルの講評欄にコメントを加えアップロードする方式を採用した。フィードバックを書き加える場合には前週のエクセルファイルの講評欄に先にコピー・ペーストしておき、そのフィードバックに対してどのような反応が該当週に見られるのか、確認出来るように工夫した。

70%程度の学生は教員からのフィードバックに反応した様子がELJに見て取れたが、残り30%程度の学生は明らかに教員からのフィードバックを見ていないようであった。この点は、大学の授業で教員からフィードバックがあるこ

とを想定していないのか、ELJを提出することに精一杯でその後の評価・フィードバックを確認する余裕がないのか、理由は現時点では不明であるが、このELJプロジェクトの課題のひとつとして考えられる点である。

### 2.4 書く量の変化

ここでは英語情報処理演習1のあるクラス（Gクラス）を例に1 Semester 15回でどの程度書く量が変化したか検討してみたい。開始当初の教員からの指示は「単語検索＋授業の感想（その他、コンピュータについて、情報社会について）を書いてゆきましょう（50 wordsが目安）、ELJの締めきりは日曜日の深夜です」であった。3週目に「50 words以上書くと評価が高くなる可能性があります、単語検索を2つ以上すると評価が高くなる可能性があります」という簡略な評価規準を提示した。また折り返し地点の7週目には「75 words以上」、13週目には目標をさらに「100 words」とELJに書く単語数の目標を引き上げた。表1は各週のELJに書かれた単語数の変化である。また、図6は語彙数の変化をグラフで示したものである。

最初は平均で50語程度であったが、回を重ねる毎にELJへ書き込まれる単語数が増加していることがわかる。また、増減はあるものの最低語数、最大語数とも増加している（図6）。増加の原因は他のスキル科目群で学んでいることが順調に各個人の英語能力として統合され英語能力が伸長したことが最も大きな要因であると考えられる。一方、教員からの目標語数の引き上げがELJに書かれる語数の引き

表 1. 英語情報処理演習 1 受講生の ELJ に書かれた語彙数の変化 (N=20)

	<i>N</i>	Min.	Max.	<i>M</i>	<i>SD</i>
ELJ2	18	27	104	55.4	17.0
ELJ3	20	15	110	67.6	22.8
ELJ4	20	47	142	81.2	26.7
ELJ5	20	33	176	85.4	36.5
ELJ6	19	46	166	88.8	32.0
ELJ7	19	55	227	106.4	39.2
ELJ8	19	57	173	101.6	29.3
ELJ9	19	75	212	113.0	41.0
ELJ10	19	73	212	107.8	35.3
ELJ11	20	71	221	124.6	38.5
ELJ12	20	55	281	135.0	57.5
ELJ13	20	65	206	136.5	41.5
ELJ14	20	50	262	131.1	46.6
ELJ15	19	73	259	143.7	55.3
Reflection	12	101	243	198.2	34.5

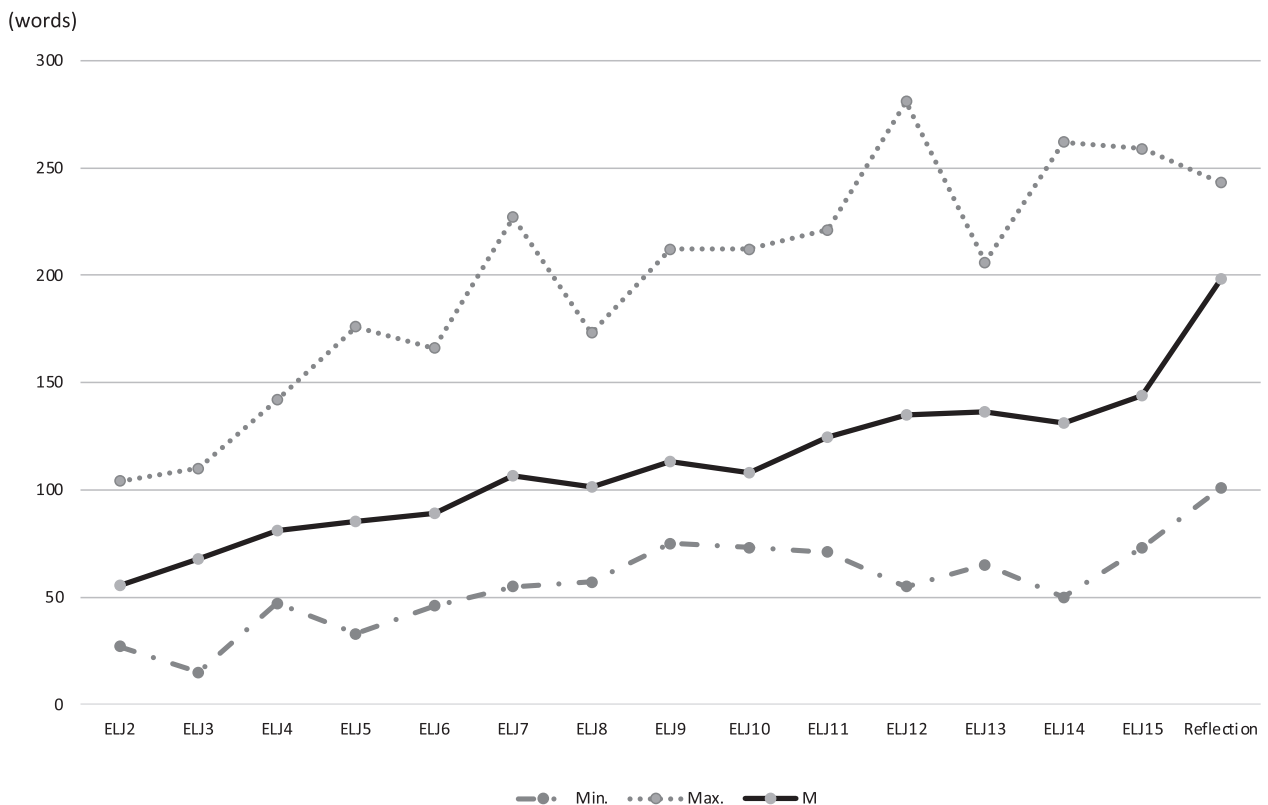


図 6. ELJ に書かれた語彙数の変化 (英語情報処理演習 1、Gクラス、2021年春学期)

上げにつながっている様相もうかがえる (ELJ 7)。Reflection は ELJ 全体を通しての振り返りであり 200 words 程度で書くように指示があったため毎回の ELJ よりは語数が増えている。

### 3 教員間の連携

#### 3.1 Writing Skills における教員間連携

ELJ の実施により、学生が授業のどんなトピックに興味を持ち、何に関心を抱いているのか、英語学習のどこに問題を抱え、どの項目の理解が進んでいないかをより把握しやすくなった。また、質問に来るような積極的な学生以外の学生の「声」も拾いやすくなり、多様な学生の情報が教員まで届くようになってきている。その為、授業を振り返る際、あるいは授業の改善を考える際の資料として活用することも少しずつ増えてきている。

また、ELJ は manaba 上のコースに毎週アップロードしてもらうことを基本としているが、そのコースは担当教員全員がアクセスできる仕組みとなっているため、自分のコース以外の他の科目での実施状況を学生の ELJ を通して知ることができる。ゆえに、実際の授業の全体像をつかみやすく、包括的なカリキュラムを考える上でも大変貴重な資料となっている。

#### 3.2 英語情報処理演習 1 における教員間連携

2021年度の授業を機に担当教員 4 名が授業内容について LINE で情報共有するようになった。これまでも E-mail でも情報共有を行ってきたが LINE はチャットに近いだけあってコミュニケーションをスムーズに行える利点がある。LINE を利用しようとしたのは本来は、依然収まらない新型コロナウイルス感染症の影響で授業が対面とオンラインを行き来する不安定な状況であったことが大きな要因であるが、ELJ についても 4 名の教員で、特にフィードバックを毎回行うことを 2021年の学期中に何度も確認することができた。コンピュータスキルを担当している教員だけあって、LINE での反応は迅速で顔を会わすことは一度も叶わなかったが十分な連携を取り、学生に対する共通の対応を取ることができた。

### 4 今後の方向性

#### 4.1 教員間連携の発展

これまでの三年間の取り組みにより、ELJ を定期的に

書くことが学生にとって「当たり前」になりつつあることは喜ばしいことである。一方で、教員間の連携には課題も多い。

ELJ はある種詳細な授業アンケートを毎回英語で書いてもらっているのに等しいが、この情報を積極的に活用しきれているとは言いがたい。学生個別の学習状況を共有する機会は増え、授業改善の情報としても役立っているが、具体的に何かを連携して実施しているまでは残念ながら至っていない。

今後は学生の自主的なアウトプットへと至る好循環を作るため、教員間で連携した成果物を生み出していく必要があるように思われる。例えば、ELJ でよく見られる日本人英語学習者特有のエラーを各教員にピックアップしてもらい、それを集約したうえで「こんな時どう書く?」といった例文集のようなものをオンラインにて毎週配信する取り組みは可能だろう。ELJ に特化した英文に関するフィードバックは、学生が英文を書く際に求めている情報と一致するため関心が高く、積極的に使おうとする動機付けになるだろう。学生の立場に立って、学生が求めていることを想像し、それを実現していくことが重要である。

#### 4.2 フィードバックの効果を上げる

“The more the better.” このひと言に尽きるものがあるが、教員からのフィードバックの頻度を上げることは容易ではない。ただ、英語情報処理演習 1 のクラスのケースが示すようにフィードバックの回数上げることは学生の ELJ に対する意欲を高める効果を持つ。そのためにはもちろん教員間の連携を取り、教員の意思統一をすることはまず重要なことである。英語英文学科では新ビジョンの策定と並行して英語英文学科教員の任務 (学生へのサポート) についても定め、授業を担当する全ての教員 (専任・嘱託教員) で共有している (図 7)。

このような共通認識を全教職員で共有することの重要性はどれほど強調してもし過ぎることはない。ただ、情熱だけで全てが解決するわけではない。スムーズかつ持続的に実施するスマート・システムの構築が重要である。英語英文学科では manaba や OneDrive など ICT を利用し<sup>12)</sup>、学生の課題提出から教員からのフィードバックを効率よく行うシステムを常時更新しているが、今後も、教員の共通認識を基礎に、引き続き柔軟で効率的なシステム構築に努め、留学することなく国内での学習を通して学生の高い英語運用能力を実現するよう、議論を深めてゆく必要があるだろう。



## 同志社女子大学表象文化学部英語英文学科の授業に関わる先生方へ

To Teachers in the Department of English, Faculty of Culture and Representation,  
Doshisha Women's College of Liberal Arts

英語英文学科では、2020年代の本学科のビジョンを議論しています。そのビジョンに先立ち、次の3つの項目を英語英文学科の授業に関わる全ての教員の共通認識のもとに取り組んでいただきたく、よろしくお願い申し上げます。

## 学生への3つのサポート (Three Provisions)

- ① 学生に迅速にフィードバックを与えること (Provide Feedback)
  - 学生のライティング、プレゼンテーションなど
- ② 学生に個人的なサポートを与えること (Provide Individual Support)
  - 必要とする学生にアドバイスをしたりサポートすること
- ③ 学生に励ましを与えること (Provide Encouragement)
  - 英語を一層使おうとするように、大学生活で「一歩踏み出すちから」が持てるように学生を励ます

図7. 学生への3つのサポート

## 参考文献

- 秋葉利治、森秀夫. (2005). 『Dialogue 1800』(改訂版). 旺文社.
- 秋葉利治、森秀夫. (2012). 『Dialogue 1800』(三訂版). 旺文社.
- 同志社女子大学英語英文学会. (2017). 『English Playbook』. Author.
- クーン、トーマス. (1971). 『科学革命の構造』(中山茂訳). みすず書房.
- Lightbown, P. M., & Spada, N. (1994). An innovative program for primary ESL students in Quebec. *TESOL Quarterly*, 28(3), 563-579.
- 文部科学省. (2008). 『中学校学習指導要領』 [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/cs/1320061.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320061.htm)
- 文部科学省. (2009). 『高等学校学習指導要領』 [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/cs/1320144.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320144.htm)
- 文部科学省. (2018). 『中学校学習指導要領』 [https://www.mext.go.jp/content/1413522\\_002.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1413522_002.pdf)
- 文部科学省. (2019). 『高等学校学習指導要領』 [https://www.mext.go.jp/content/1384661\\_6\\_1\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1384661_6_1_3.pdf)
- 吉見俊哉. (2021). 『大学は何処へ：未来への設計』. 岩波新書.
- 若本夏美、今井由美子、大塚朝美、杉森直樹. (2017). 『国

際語しての英語：進化する英語科教育法』松柏社.

\*本研究は、2020年度同志社女子大学共同研究助成（イングリッシュ・ジャーナル・ライティングは英語ライティング能力の伸張にいかに関与するか）の成果の一部である。

## 注

- 1 文部科学省新指導要領（文部科学省、2018、19）では4つのスキルを同等に重要であるとしている。
- 2 Swain 博士は2008年に来日し、同志社大学今出川キャンパスにて講演を行っている。Swain 博士は、アウトプットの必要性はもちろんであるが、その前提としてインプットがあることを強調していた（Personal Communication, 2008年10月24日）
- 3 Krashen 博士も2019年に来日し、Swain 博士同様、同志社大学今出川キャンパスにて講演を行った（2019年12月6日）。その際にも読書を中心とするインプットの重要性を力説していた。第一筆者は、その際「Reading が嫌いな学習者も存在するがこの点についてはどう考えれば良いのか」質疑の冒頭で質問に立ったが「自分に合った本に出会っていないだけで誰もが読書によって目標言語能力（英語）を伸ばすことがで

きる」と Krashen 博士は回答している。

- 4 Personal Communication (2020, 3, 1)。
- 5 大学院コースではあるが、第一筆者が修了したトロント大学ではほぼ全ての授業が2コマ連続(90分×2)で行われていた。
- 6 事実、第一筆者は2020年度、講義科目ではあったが、春学期・秋学期と年間(2セメスター連続)で開講されていた科目をまとめ、週2回の授業を行った。具体的には、英語英文学科開講科目、「外国語教育論1」(春学期)「外国語教育論2」(秋学期)を「外国語教育論1・2」(春学期)として、「第二言語習得論1」(春学期)「第二言語習得論2」(秋学期)を「第二言語習得論1・2」(秋学期)として開講した。授業は週2回、セメスターの途中(クォーターに近い)で1の授業が終了し、テスト、2の授業がスタート。このことは大きな変化を産みだした。週2回になったことから受講生は1/4になったことは負の側面かもしれないが、教員は2つから1つに科目の種類が絞られたため、授業への集中力が高まり、より掘り下げた内容の講義や議論を展開することができた。受講生が激減したということもあるが、週2回授業で顔を会わすことによって(新型コロナウイルス感染症の影響で春学期は全てオンライン授業であったが)受講生とのコミュニケーションも円滑にすすめることができた。週2回の授業になれば学生の受講する科目数も減少するのだから、受講者数が減少するのも自然なことかもしれない。
- 7 2018年度からは『English Playbook』(英語英文学会、2017)も共通テキストに選定している。
- 8 図1は現在使用している秋葉・森(2012)をもとにしたもの。
- 9 英語情報処理演習1の科目のみ従来型のMS-WORDを利用する方式を採用している。これは科目の性格上、文書のフォーマット(例えば、ダブルスペースなど)の練習を兼ねるためである。
- 10 アドバイザークラスの担当教員は、高校でいう「担任」のような役割を一部果たし、科目以外の伝達事項の他、学生の学生生活などについてもフォローを行う。
- 11 本人の許諾を得て掲載。
- 12 すでに2021年秋学期からはOneDriveを活用した学生の提出物をより効果的に確認する方法を試行している。